

宝曆一〇年(一七六〇)、露人が南下して北千島を占拠したとの警報が達してから、北辺の風雲は俄かに急を告げるに至った。よつて幕府は北方の護りはこれを一松前藩に委するに忍びず、寛政十一年(一七九七)より日高以東の地を直接支配することとした。即ち箱館に奉行を派し、有力な幕僚は沿岸を巡視して經營の策をねりまた南部藩兵は日高の守備に任じた。最初に行われたのは、東部に通ずる軍道の開通であつて、近藤重藏等の努力によつて、一応これは美事に完成した。そしてこれはとりもなおさず日高開発の第一の進水を見ることとなつた。各会所には農作物の試作や、養蚕が行われ、また元浦河牧場が開設されるに至つた。様似には官寺等幾院が建立され、宗門取締と共に辺境居住者の精神的支柱となつた。この頃すでに幌泉には和人の定住者が認められるのであるが、初代秀暁は名僧のほまれ高く、日高の先駆的教化者でもあつた。また伊能忠敬は、当時北辺の急を察して蝦夷地の測量をこころざし、寛政十二年、自から克明に歩測し、天度をはかりつゝ日高の海岸を過ぎていつた。

文政四年(一八二二)より安政元年(一八五四)に至る間、一時再び松前藩政に復したが、諸事守成のみに終始停滞した。安政二年より改めて奉行庁下に属したが、僅か十数年で明治維新をむかへるに至つた。日高各地は様似に在勤する調役に統轄され、沙流、静内、様似、幌泉には調役下役が駐在した。この間奉行は外交の事に忙殺されて、日高の開発に意を用いる暇もなかつたが、山田文右衛門が沙流の海浜に投石して昆布礁を造成したことは日高開発史上特筆すべき事柄であつた。安政二年には松浦武四郎が、各エタンの酋長を案内人として日高の各地を跋渉し、詳しく山川の形勢を取調べた。これによつて伊能氏の海岸線の中に、内陸の地勢は一応明瞭の追隨をゆるさぬものであつた。

日高の天地に、和人が入り込んで来て經營に従つてからここに至るまで凡そ三〇〇年、微々たるものではあつたが開発向上の道を辿つたといつてよい。しかしながら鎖国封建制下の開発工作には自から限度があり、飛躍的發展は明治以降の組織的施策にまたなければならなかつた。

一 概 説

第一編 開発 前史

二 遺物と口碑

一 沙流川下流の遺跡

富川町のビダルバ及び川東墓地の丘陵端から土器石器の出土がある。何れも黒土層下にあつて薄手縄文或はそれに擦文を加味したもので、文様も多分に技巧的である。

福満に至る台地上において発見された一遺跡は、地表下一米の火山灰及び風化した赤土の下にあつて、極めてそまつな厚手縄文式の土器を出し、この地方の最も古い先住民の遺物と考えられる。この近くにはまた数群の堅穴遺跡がある。火山灰層の畑地の上に黒い円形を示し、作物はその部分だけ特に出産が盛い。発掘の必要があるが、表面採取においては土石器を出さず、多くの鹿の骨、歯、貝がらが散在し、穴あき銭を拾つたことがあるともいふ、銅製の鏝も出土しているところよりみれば、恐らく近世のものであらう。別の箇所においてはおびただしい鹿骨の散在がみられ、ここでは円形の黒土層(たて穴中に堆積した腐植質)はみられず、若干の鉄片をだし、鹿骨のあるものは、大きなあご骨の中に歯のこり、その色沢もさまで古くはない。恐らく百年を出ない比較的新しい時代の居住地ではないかと推定される。この附近の古地名をイタタウス即ち割截するところ(鹿肉を)ということからして、狩猟者のあとであらう。

沙流川口に近い富浜の肥沃地には多少の貝がら、鉄鍋片、小刀、斧、船釘などが散在しているところがあるが、近代アイヌの残したものが或は寛政十二年八王子屯田營農のあとであるかもしれない。

チャシは富川町東のビダルバの丘端にあるといわれるがその形は判然しない。富川台地の丘端にあるものは、小方形の環濠が明瞭

に認められ、これには口碑が残されて居り、近くにそのものの子孫の居住のあとがあるが、遺物は見当らない。

富浜海岸の小岬シノタイ(近藤重藏義経像を祀つたと伝えられるところ)に、やゝ貝層にとむ遺物包含層がある。石器、薄手縄文式土器を少しく出すが、貝塚と称する程のものではない。

2 三石の遺跡

三石港後背台地(シヨツアの古名がある)からは古くから土石器を出している。古記録によれば、

シヨツア上は平山麓、樹木なく海に向いたる方、三ヶ月形の土手三有り。其の他に堀跡あり、内に穴居跡十八九並ぶ、古老の語る所によれば、城跡なりと。雷斧、石鏃、陶器の破片多く、其の辺一面の畑跡あり。会所の附近より北の辺矢の根の作り屑と見えて紋別石の欠片多し。

これ等の遺物は古くから採取されたと伝えられているが、今は地形も害われ遺物も見出し難い。

三石川中流の富沢村台地(マツタ野)の延田川にのぞむ丘端は豊富な遺物を出し、またこの中段の湿地はもと森林が繁茂し清水が湧出して、このところに土壘を設けて砦とし、十勝アイヌと交戦して大捷したと伝えられている。松浦武四郎の東蝦夷日誌にトミウシ(戦場)と書かれているのは、このところである。この附近の土器は厚手縄文、薄手縄文、擦文の何れもがみられ、長い居住の歴史を物語っている。土器片の中には把手、注口、土板、土偶とおぼしいものがある。石器も多く、石剣、かざり玉、それから用途不明の石器などを出している。石鏃について計測されたものによると、五一四個につき、

形式	有柄型 四七%	三角型 四一%
柳葉型	一四%	
用石	黒耀石 九八%	他 八%
二遺物と口碑		

五

第一編 開発前史

大きさ 細小 八粒 最大 一五〇粒
平均 一五—三〇粒

六

概して小形であるのは黒耀石の入手がたかつたためであろう。小形であつてもブシ毒を使用すれば目的を達することが出来る筈であるから、石器時代既にブシの効用を知つていたと推定してよからう。

3 襟裳岬地方の遺跡

百人浜は古くから遺物の出土を以て知られているが、本道一般に有柄石鏃の多いのに反して、ここは無柄石鏃の多い土地として注目されていた。その一部は東京国立博物館に展示されている

フレベツ川畔の裸地に数十の堅穴群が発見された。堅穴の中より厚手縄文と薄手縄文の中間型式の土器を出し、石鏃は各型式のもの混じり、骨鏃も出ている。一穴の床に三重の堆積物があつて、時期をへだてて三回にわたつて使用されたとおぼしいものがある。この附近はかつて森林に被われていたが、風蝕をうけて表土が飛散したので、堅穴は赤土の上に黒く点在し浅くなつて居る。

油駒台地にチャシがある。約二八米—五六米の方形に深さ六十程の濠が残つていて、附近に遺物散布地があり、薄手縄文式土器を中に見出し、

幌泉市街の西端ナンブケに、地下一米の黒土層中に薄手縄文式土器を出す堅穴跡がある。

角舞段丘も遺物にとみ、厚手縄文式土器その他を出している。

日高の遺物はこの他浦河、静内等においても発見されているが、全体として調査が行きとどかず、結論的な判断は今後に俟たなければならぬ。

4 津浪の口碑

日高に多い口碑の一つは津浪に関するものであつて、アイヌの受けた自然の災害の中で最も恐るべきものであつたことがわかる。有史以後でも津浪はこの地方でもつとも被害が大きいため、これは当然のことであらう。

沙流川筋のサンナコロ(鯨の尾)シウタ(かすべ)ロクンデエト(船の先)などがあり、厚別川筋のイタツキ(板の漂着したところ)ヌモトル(板の折れ)ナノミ(舟の先)など、すべて津浪の口碑を伴うものである。

静内では大昔、海嘯のきらう酒粕をコタン附近に散布してその害をまぬかれたと伝えられるが、附近の山には船や鯨の骨が打ち上げられたという言い伝えがある。

三石では津浪をさけてサマツケヌブリ(通称横山)とシヤマン、山に上つたが、高いサマツケヌブリに上つたものが、低いシヤマンへ山にのがれたものを笑つたので、神の怒にふれかえつてサマツケの方が冠水して全部死んだという伝説もある。

幌別川筋では大津浪のとき、サマツケヌブリへ鯨があがり、今、海辺村といつていところも鯨の漂着したところという。そのとき村人は鶴苦山と白泉山に逃れたが、前者が低いので後者がそれをあざわらつたため、結果は三石の場合と同じであつたといふことである。

5 掠奪戦(トバトミ)の口碑

津浪と共に古アイヌの脳裏に強く残つたものは、民族間の争闘である。民族争闘は十勝勢の来襲に関するものが多いが、一方十勝地方には日高勢の侵入を物語るものがすくなくない。胆振方面との間にはこのことがなく古来友好的であつたものようである。

沙流川筋の地名の大半は、沙流川奥より来つて部落を掠奪した十勝アイヌとの交戦を記念している。即ちシユッタ(鍋を作つた)

二 遺物と口碑

七

第一編 開発 前史

八

イタカナイ(盗人沢)フブボコマナイ(とどのかげにある沢)イケウレ(木をきるところ)など多くの口碑をもっている。沙流川口の富川附近、染退川筋、三石川筋にもこの種の伝承がすくなくない。

襟裳峠については、十勝アイヌと日高アイヌの境界は、古くは油駒に近いチカブノイであつたが、後に現在のビタヌンケブに定められた。地名の意味は争いえらびぬくということで、敗者の宝器の中より約定の教だけえらびとつて和解したことを示している。したがつて場所時代においても両者の権益の入会であつた。明治になつて境界確定の必要に迫られたときは、十勝の代表石黒林太郎と日高の代表塚清兵衛がその国境に立会つて論争妥結したといわれる。

日高アイヌが越境して十勝に進出した例は、大津村の旅来砦址にある。近くのカンカンピラによる日高軍が、十勝軍の旅来を攻略し之を全滅させたという伝説がある。帯広市に近い伏古の神居沼(チホマトウ)は、日高アイヌが溺没して死んだところとされている。猿別金刀比羅山は天正年間(三百六十余年前)酋長サアシコトナイが、日高軍の攻撃にあえなく一族潰滅したところと伝えられる。この他土幌、大正(虎賁)などの古地名も、みな掠奪戦に関係がある。掠奪の目的の一は掠奪婚であるともいわれる。

明和七年(一七七〇)十勝と沙流のアイヌの間に紛争を生じ、十勝より松前に達した報告によれば、十勝アイヌは日常の仕事も放てきして、専ら打合いの準備に没頭し頗る不穩の情勢であるから、至急鎮撫の人を派してほしいといふことが見えているから、両者の反目は口碑時代より引きつづいたものと思われるのである。

6 民族移動の口碑

長い年月の間に、部落そのものが屢々移動し、或は争乱を反覆したりして、異質の文化を相当吸収して来たものと一応考えられるのである。日高におけるアイヌの系統については、最も変化しがたいとされる墓標によつて、考えて見るのが適切であると思うが、染退川を一線としてその東方をメナシクルと称し、西方をサルンクルと名づける別系統であるといふことはさきき概説のところでも述べた。寛文事変などもかゝる系統を異にするところに、宿命的な対立が生じたものと考えられるのである。

言語上よりみると、これも同じく染退川が主要な分界になつてゐる。即ち釧路十勝の沿岸を南下し襟裳岬を北上する一つの言語系統と、日本海岸を南下し長万部地峡部を噴火灣に出て依然南下する分派と、室蘭に出て日高に達する分派とがあり、さらにそれは二分して一は沙流河谷をさかのぼり、他は染退川の線に達するということができる。

口碑による個々の部落の資料は信憑するに足りないが、その二三を参考までに挙げて見よう。

平取村幌去には十勝より古く来住したフモシルシを祖とするものと、沙流原住というシサンタルと、松浦武四郎(後出)によつて津軽半島(東北アイヌの最後の部落)より来住したと指摘された三つの系統のものがあつたといわれる。

平取市街地では十勝(釧路、北見)系のフモシルシを祖とするものと、鷓川奥シナンタルを祖とするものがある。

同村平賀では二派あるが、共に鷓川奥のシナンタルより発して、後にたがいに分派して紋章を異にするに至つたものである。平賀に近い門別村福満の一族(鳩沼氏)はその祖を北見に発し、二風谷に至り、後鹿島の関係上門別川上のニナツミ(広富)に移り、さらに明治になつて盤業授産のために平賀村に移され、明治三十一年の洪水によつて現地に移つたといわれる。同じ門別村幾千世アイヌの祖は新冠において、漂着したアトヤッコなる女性と婚し、門別に移りすんだが後門別会所の和人と混血したという。

なお、胆振の鷓川では、その祖を漂着姫とし、幌泉—門別—門別奥—福満—鷓川奥イクベツ—鷓川珍(現在)に至つたと信じてゐる。

様似村岡田では釧路—幌泉—岡田といひ、浦河町杵臼では饑饉の年に食を求めて十勝より放浪してここに住みついたと称してゐる。

二 遺物と口碑

九

第一編 開発前史

一〇

三 アイヌの自然と生活

一 動植物の利用

熊祭によつて知られてゐる通り、アイヌは熊を狩り或は飼育して肉をたべ皮を利用した。これらには特別の祭式がともなつていて、それはまた社交の機会ともなつた。熊狩には犬とフシ矢が欠くべからざるものであつた。

鹿は夏になると西蝦夷地方面に分散して生活してゐたが、冬になると積雪のため笹が埋れまた歩行も不自由になるため、みな東蝦夷地に移動した。この鹿群の通路は毎年ほぼ一定して、そこは自ら一つの細道となつてゐた。アイヌはこのようなところをまぢうけて、犬を使つて追ひだし、獵獲したものである。また平取村紫雲古津でユツクチカウシの称ある屋のように、台地上を追いつめて崖端から墜死させたこともあつた。これはトナカイ期原人の野馬を狩つたのと全く同じである。平取村荷負のカンカンピラも同様といわれる。鹿肉はそのまゝ煮食するほかラカンという燻肉に製して保存し、脂肪も保存して利用した。日高地方にアイヌの多い有力な理由は、鹿が多く集合する地域であつたからといわれる。鹿皮、鹿角は交易品としても重要なものであつた。

狼はホロケウまたはエタコイキといひ、アイヌの生活には余り関係がないが、鹿にとつては恐るべき害敵であつた。

鮭は鹿と共にアイヌの主食をなすものであつて、カムイチエブ(神魚)といふことはよくこのことを物語つてゐる。鮭は古くはウライ(やな)によつてとらえ、また木の皮であんだ網をつかつた。マレツボという鈎もたくみに使つてゐた。初冬にとつた鮭を木にかけて凍れはしとしアマトと称して高足の庫(プー)に貯蔵した。それから冷凍したものはルイベといつた。鮭鱈以外の魚は余り重視されなかつたが、ただ沙流川のシシャモ(柳葉魚)の例によつても知られるように、鮭鱈の凶漁の年にはもちろん他の魚によつて